

青森県山野峠遺跡出土の土器棺等の再検討

Reexamination of the jar coffin excavated from the Sannotoge site in Aomori Prefecture

鹿又 喜隆*・青木 飛楠子**・永瀬 史人***・澤田 純明****・佐伯 史子****・児玉 大成*****

* 東北大学大学院文学研究科 ** ランスタッド株式会社 *** さいたま市教育委員会
**** 新潟医療福祉大学自然人類学研究所 ***** 青森市教育委員会

○ Yoshitaka Kanomata*, Hinako Aoki**, Fumihito Nagase***, Junmei Sawada****,
Fumiko Saeki***** and Daisei Kodama*****

*Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University, **Randstad Ltd.,
Saitama City Education Board, *Institute of Physical Anthropology, Niigata University of Health and Welfare,
*****Aomori City Education Board

Abstract: This paper summarizes the results of reorganizing excavated materials and survey records from the Sannotoge site (formerly Kugurizaka site) in Aomori City, Aomori Prefecture. Several earthenware coffin tombs were discovered at the site in 1933, and Professor Sadakichi Kita of Tohoku Imperial University conducted an excavation survey. As a result, it was revealed that there was one or two earthenware coffins inside each stone chamber made of stone slabs belonging to the late Jomon period, and that it also contained human bones. The stone chambers were arranged in rows, revealing a unique burial method. Some of the materials from the excavation were brought back to Tohoku University, but no detailed report was made after that. In this paper, we will report on the details of these materials for the first time 90 years since their excavation, and attempt to reevaluate the Sannotoge site from a modern perspective. Specific results include: (1) we were able to present various materials that Prof. Kita brought back. (2) The earthenware coffin was missing some of the fragments after the discovery, and it was in a more complete form when it was discovered. (3) The shallow bowl is most likely the pottery A shown in the sketch (Figure 1). (4) Earthenware coffins are constructed using the integrated layout method, and the construction procedure can be restored. (5) The earthenware coffin was painted red, but the lower half of the outer surface and the inner surface below the rim were not painted. (6) The minimum number of human individuals contained in the earthenware coffin was three in total, one child and two adults, and there were no gnaw marks at all, indicating that the remains were in an environment where they were less likely to be attacked by animals at the time of skeletalization. (7) Some of the human bones have been found to have a red coloration, suggesting that they were coated with red pigment during reburial. (8) Most of the stone bars are made from unprocessed natural stone.

1. はじめに

本論は青森県青森市山野峠遺跡（久栗坂遺跡）の出土品と記録の再整理の成果をまとめたものである。1933年に山野峠遺跡で土器棺墓が発見され、青森県史蹟調査委員であった佐々木新七氏に報告があった。その後、東北帝国大学の喜田貞吉氏は佐々木氏を訪問し、当遺跡の発掘調査を実施した。その結果、扁平な石材で四方および天井をめぐる小石室が6基検出された（喜田 1934a、図1：葛西 2002）。小石室の中から計12個の土器棺が出土した。これ

らの土器棺は赤彩が施され、それぞれ大きさが異なり、精粗があり、その中の3個には人骨が内包されていたが（註1）、その後、江坂輝彌氏によって再調査が行われた（江坂 1967a）。その結果、1933年発見の石棺墓と並列して、6基の石棺墓が新たに発見された。さらに、1970年と1981年に青森市教育委員会が再調査を実施し、1981年の調査で新たにもう一つの石棺墓が見つかった（青森市教育委員会 1983）。江坂氏の調査や青森市教育委員会による調査で出土した資料は詳細な報告がなされてきたが、喜田氏が東北大学に持ち帰った資料については現在まで全容が報告なされ

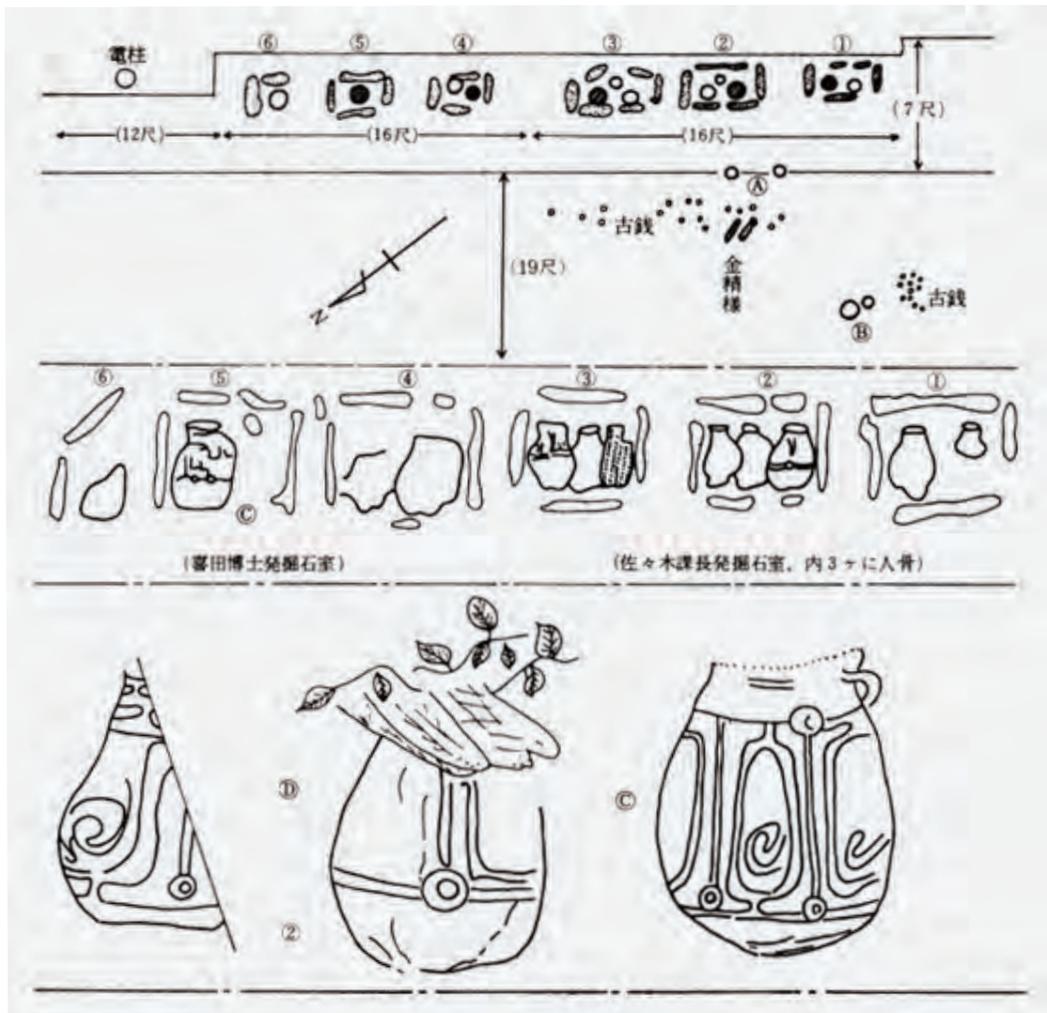


図1 山野峠遺跡調査区スケッチ（葛西 2002 より）

るに至っていない。そこで、本論では、出土品の詳細な説明と図面の提示を行うと共に、当時の写真記録を加えてその出土状況を説明したい。なお、各節の文末に文責者を括弧書きで記した。（鹿又）

2. 山野峠遺跡資料のアーカイブと土器復元作業

(1) 経緯

筆者の一人である鹿又は東北大学考古学研究室の古写真や乾板写真のデジタル化を2014年に開始した。その過程で山野峠遺跡の古写真4枚を発見し（図2～5）、未公開の写真（図2、5）が含まれていることから、その記録の重要性を意識した。その後、2015年度に鹿又が東北大学埋蔵文化財調査室に山野峠遺跡の土器棺の復元を依頼し、同室の白石浩子氏が土器棺の復元作業を担当した。復元作業は2015

年6月から開始され、2016年3月に復元が完了した。復元された土器の写真は同室の菅野智則氏によって写真撮影が進められた（図7）。2018年に執筆者の一人である青木が実測図を作成した（青木飛楠子 2020『縄文時代後晩期の墓制研究—青森県山野峠遺跡出土資料を中心に—』令和元年度卒業論文）。復元された土器棺や古写真は2022年度の企画展などで使用され、活用が始まっている（鹿又 2022、鹿又ほか 2023）。また、土器棺について永瀬が2021年12月13日と2023年2月14日に3D化に必要な写真撮影を実施した。その後、鹿又が本学の収蔵資料を悉皆的に調査し、2023年11月に石棒と人骨が収蔵庫に保管されていることを確認した。これまで、山野峠遺跡の出土品の中から土器2点と人骨が東北大学に持ち帰られたことが述べられていた（喜田 1934a、江坂 1968、葛西 1975、2002、2006b等）。この持ち帰られた人骨については「2人分」が甕棺に納め



図2 山野峠遺跡の発掘調査風景 1



図3 山野峠遺跡の発掘調査風景 2



図4 山野峠遺跡の発掘調査風景 3



図5 山野峠遺跡の発掘調査風景 4

られていたとの記載がある（葛西 1975）が、石棒が持ち帰られたことは上記文献には記載されていなかった。そこで、それらの遺物の写真撮影を鹿又が改めて行った。2023年12月2日に澤田が人骨の鑑定を開始し、12月26日に児玉が土器棺の赤彩状況を観察し、本報告に加えた。

（2）写真アーカイブ

最初に古写真の記録を参考に、改めて山野峠遺跡の発見や調査の経緯を振り返りたい。今回の古写真の記録から付加された情報には下線を付している。

山野峠遺跡は青森市久栗坂字山辺に位置する。当初は久栗坂遺跡と呼称された。浅虫温泉から南西に進んだ田頭山と弁財山との間を過ぎて、山野地区に通じる坂道の峠にある。1933年11月17日に坂道の拡張工事に際して偶然発見された。当初、土器棺は道路の西側に2個、東側に2個見つけたが、鍬に当たって壊れてしまい、現在は詳細を知

ることが出来ない。11月23日に青森県史蹟調査委員であった佐々木新七氏は、土器棺が見つかった場所の背後を発掘した。その結果、扁平な石材で四方および天井を巡らした石室が3基発見された。また、最も南に位置する石室に2個、中央と北の石室にそれぞれ1個の土器棺を発見した。東北大学の喜田貞吉氏は佐々木氏を訪問し、当遺跡の発掘調査を実施した。その時の写真が図2である。調査地と思われる場所には男性15名程が居り、その周辺に少女を伴った女性2名（左端）や少年1名（右端）の姿も見える。掘り出されたと思われる不整形な扁平石が25個ほど斜面の下に集められている。調査地の傍らには木材で組まれた箱があり、資料を入れるために用意されていたと思われる。図3は、土器棺を観察する喜田氏の姿を示している。喜田氏の論考(1934a)に掲載の写真と同一である。また、この写真は、昭和8年(1933年)11月28日の河北新報に掲載された写真と同じものである（葛西 2006a）。喜田氏はいつも通りの

山高帽をかぶった和装であり、常に持ち歩いている信玄袋を携帯し、資料か手帳を手に、煙草をふかしている。この写真の土器棺の向きは、図7-dの向きと一致する。そして、現在は欠けているこの土器棺の左側の部分は、元々は欠けていなかったことが分かる。図4はこの土器が完掘された様子を示している。喜田氏(1934a)に掲載の写真は、これと同じ方向から撮影されたものである。この写真の撮影方向は図5とほぼ一緒である。やはり土器の左下の部分は残っていたことが明瞭に分かる。また、土器の内部に土壤が詰まっている様子もうかがえる。図5は土器を全て取り外して、中の土壤を残した状態である。土器の底面付近に白色の人骨が見えるが、その状態は一部碎片化しており、必ずしも保存状態が良いとは言えない。写真からは人骨の部位などは判断しがたい。

山野峠遺跡の遺物の共伴関係はミネルヴァ論争(1936年)の当事者である喜田氏の見解に大きな影響を与えていると思われ(喜田1934b追記)、当時の河北新報の記事には「久栗坂から発見されたアイヌ族の古墳」と書かれている(葛西2006a)。また、石棺に伴う石棒「金精様」と古銭(寛永、永樂銭)の共伴関係を強く意識している。人骨に関しては「腐色はしてゐたが立派に人骨が入つてゐた」と記載があり、図5の状況を物語っている。そして「歯がソックリ附着してゐる顎骨もあり、骨の咀嚼面から判断して若い人の骨だ」と記載している。この人骨を喜田氏が東北大学に持ち帰り、東北大学医学部の長谷部言人氏の鑑定を求めていると書かれている(喜田1934a)。

喜田氏の記述(1934a)では、金精様が出た所に見当をつけて鋤を入れると必ず石室を掘り当てたことから「陽石と甕とは密接の関係があるものらしい」と述べている。出土状況のスケッチをみると(図1)、図の上段のAとBは共伴する小土器である。葛西氏(2002、2006b)では、図1のA、Bに当たる土器は、当初道路の西側と東側に2個ずつ発見された甕形土器と推定されているが、それは誤りであり、以下で述べるように本論で示すこの浅鉢がAに該当する。喜田の文章では、甕形土器と小土器は明確に区別して記載されている。

喜田が指摘するように、東側の土器棺の側から石皿と石棒が一对となり、伏せた石皿の下に石棒が置かれた状態で見ついているという。図面には石棒を示す金精様の記載があるが、石皿との関係は不明である。上段の図で斜線が入っている土器棺には人骨が内包されている。出土した全ての土器棺は朱塗りであった。

喜田が持ち帰った土器棺は図1-cにあたり、⑤の石室から出土したとされる(葛西2002、2006b)。また、下記で詳述する浅鉢はA、Bの小土器のどちらかと推定されるが、Aの土器は復元中との記載があるので、おそらくAの小土器のうちのどちらか、あるいはその両者と思われる。

本論で紹介する土器は、土器棺1点と、浅鉢1点である。

前者は上記の通り、破片の状態でも保管されていたものを、2015年度に復元修復を行ったものである。(鹿又・青木)

3. 出土遺物

(1) 土器棺(図6、7)

器高67.7cm、口径29.5cm、胴部最大径51cm(内部直径47cm)、底径25.8cmを呈する大型の壺形土器である。江坂氏(1968)が記載の法量とほぼ一致する。胎土中には径5mm以下の長石を含んでいる。色調は明褐色である。焼成は良好で、底部付近には黒斑がある。口縁部には橋状把手が付されている。底部は平底で網代圧痕(ごぎ目編み)が見られる。

土器棺は輪積み法によって形成され、粘土紐の幅はおおよそ4~6cmである。器面の調整は縦ミガキが多く、胴部下半の隆帯の下は横ミガキがなされる。底部付近になると、縦ミガキに戻る。橋状把手においても横ミガキが主体であり、一部縦ミガキをされた後に横ミガキをされた部位がある。文様の区画と区画の間は縦ミガキであるが、口縁と底部には横ナデがみられる。

口縁部と頸部には横に走る沈線が引かれ、その間を縦位の沈線で繋ぎ、内部に竹管による刺突文が施される。5つの橋状把手を繋ぐ隆帯の内側はクランク状の沈線文が描かれる。胴部の文様は5単位であり、各単位内では上下で文様が異なる。上部の文様は弓状の沈線文であり、下部の文様は変形渦巻文である。粘土紐で隆帯を付けた後、その両脇を沈線で囲んでいる。それぞれの隆帯が交差する点には、円形の貼付文が付けられ、中心には竹管による刺突文が施される。単位と単位を区切る隆帯の中央には、沈線が施される。

把手下部の舌状の隆帯と、胴中央の円形の貼付文は、指で押して付けられている。沈線には重なる部分があり、少なくとも1度引いた沈線の上に再度沈線を引いている。

5単位の文様はほぼ同じであるが、細部で違いがみられる。その1つは、それぞれの面で描かれる文様の順番である。また、上部の区画の中央にある縦に走る2本の沈線を結ぶ線にも違いがあり、S字状に繋ぐものと、横向きの弧線で繋ぐものがある。縦に走る2本の沈線を挟む弓状の沈線文は、片側に2本施される面と、1本のみ施される面がある。区画と頸部の文様を繋ぐ隆帯上、区画と胴下部を繋ぐ隆帯上、口縁部と頸部の間に施される刺突文の数は、3つの場合と4つの場合がある。また、頸部に施される舌状の隆帯も施されていない面が1つある。

内面は口縁部から底部付近まで横ミガキが施される。内面の底部付近は主に横ナデ調整である。

胎土に含まれる混和材は、彩色やミガキの影響で分かり難い部分が多いが、内面の底部を見ると、直径1mm未満の石英や角閃石などの反射鉱物が認められる。(青木)

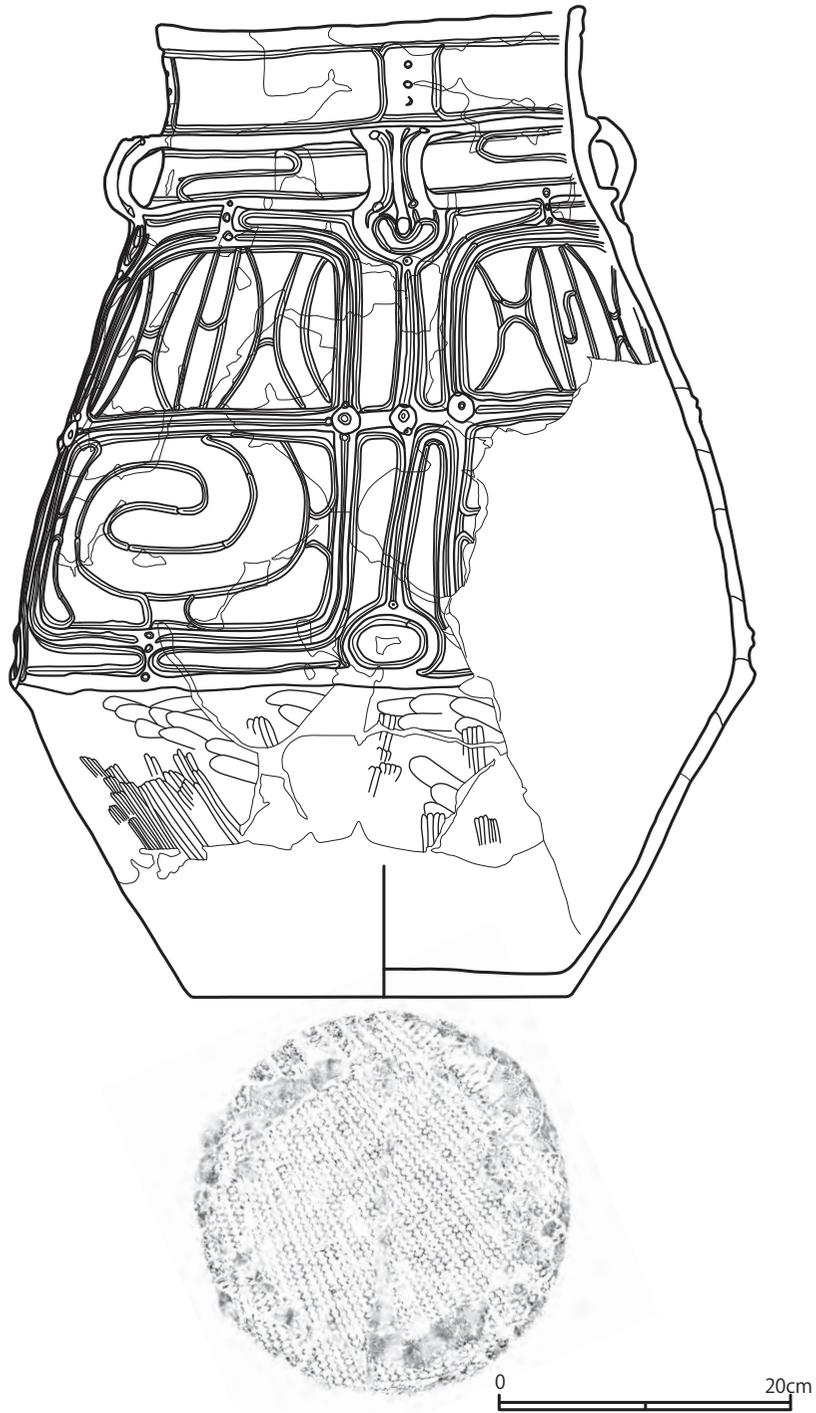


図6 山野峠遺跡出土土器棺



图7 山野峠遺跡出土土器棺

(2) 浅鉢 (図 8、図 9-1, 2)

破片で出土したものであるが、全体の形状をある程度復元できる。器高 8.5cm、口径 22cm を呈する浅鉢である。現状は 4 つに分かれているが、同一個体と考えられる。胎土中には径 1mm 未満の石英や長石、角閃石がわずかに含まれる。色調は主に茶褐色から明黄褐色で、焼成は良好である。4 単位の文様で構成され、口縁部に 2 箇所突起帯が付されていたと考えられるが、うち 1 個しか残存していない。文様は連携コ字状文であり、縄文のない部分と縄文のある部分は交互になる。単節 RL 縄文が施された後に線刻され、区画内の縄文が磨り消される。連携コ字状文の内側には舌弧文が施される。器面は、沈線によって区画された部分ごとにミガキの方向を変えており、横長の部分には横方向に、縦長の部分には縦方向にミガキが施される。内面は横ナデの後、横ミガキがなされる。(青木)

(3) 石器 (図 9-3 ~ 7)

図 9-3 は長さ 135.3mm、幅 39.1mm、厚さ 37.3mm、重さ 321.80g、断面三角形の棒状礫であり、下半が折れている。明確な擦痕や敲打痕は認められない。細粒砂岩。

図 9-4 は長さ 98.1mm、幅 49.7mm、厚さ 33.3mm、重さ 219.29g の繭状の自然礫。明確な擦痕や敲打痕は認められない。溶結凝灰岩。

図 9-5 は長さ 137.2mm、幅 39.5mm、厚さ 23.4mm、重さ 169.13g の棒状の自然礫である。明確な擦痕や敲打痕はないが、表面は広く摩滅を帯び、光沢が見られる。細粒砂岩。

図 9-6 は長さ 195mm、幅 47.6mm、厚さ 31.2mm、重さ 447.76g である。棒状の自然石の正面に 2 ヶ所、裏面に 1 ヶ所の窪みがあり、細身であるため、通常の凹石とは異なる。3 ヶ所を対象物にぶつけるような動きで、つまり叩き石と同様な保持法で使用されたと考えられる。通常の叩き石よりも、窪みの剥離が大きく、窪みから剥離痕が生じている部分もある。したがって、岩石のような硬い物体を叩くのに使われたと推定される。以下に記すように、喜田氏 (1934a) が述べる亀頭形を刻したものであるかもしれない。細粒砂岩製。

図 9-7 は長さ 121.4mm、幅 25.6mm、厚さ 24.9mm、重さ 101.75g の不整形な棒状礫である。加工痕が認められない。細粒砂岩。

以上、棒状の礫および礫石器、合わせて 5 点がある。これらが喜田氏 (1934a) が記した陽石や金精様と予想され、東北大学に持ち込まれた浅鉢が図 1 の A であれば、それに隣接する図 1 の金精様に該当する資料を含んでいる可能性がある。喜田氏の記載には、「自然石及び之に加工した陽石」とあり、その構成は一致する。また、「今も現に同縣上北郡野邊地町字石神なる道祖神に供へてあるものと同様なもの」とあり、決してご本尊となる大型石棒ではなく、小型のもの (供え物) であることを推測させる。そして、「明らかに

亀頭形を刻したもの」の「其の一個は両端に亀頭を刻してゐる」と書かれており、図 9-6 を示す可能性が高い。さらに、「長さ三四寸から五六寸に達する」とあり、図 9-3 ~ 7 のサイズと一致する。スケッチには「金精様は大小合わせて 3 ヶ」と注記があるが (葛西 2002, 2006b)、収蔵資料は 5 点である。小型の 2 点は金精様には数えられなかったのかもしれない。(鹿又)

4. 3D データとオルソ画像の作成

使用機材は、OM デジタルソリューションズ社製のコンパクトデジタルカメラ、「Tough TG-6」を用いた。当カメラは一画レフのカメラと比べて小型軽量であり、様々なアングルからの撮影が必要な縄文土器の立体的な装飾や、なるべく短時間で大量の写真を撮影する際に適しているといえる。今回は、撮影モードを「顕微鏡モード」として、土器棺の内外面、及び底部をなるべく近接した距離かつ写真同士のオーバーラップを取って計 1106 枚撮影した。

3D データの作成は、Agisoft 社製の「Metashape 2.0.3」を用いた。当ソフトは、撮影した遺構・遺物写真を三次元化する作業において広く普及しており、オルソ画像の作成や 3D データの活用において既に有効なツールとなっている。

3D データとオルソ画像の作成に際しては、横山真、千葉史 (株式会社ラング) 両氏の協力を得た。作成は次の手順で行った。①写真のアライメント「精度：高」→②ポイントクラウド構築 (品質：最高) →③メッシュ構築 (ポリゴン数：高) →④テクスチャー構築 (テクスチャーサイズ 16384 × 1) によって得られたデータであり、これを基にしてオルソ画像を抽出している。

オルソ画像は、土器棺の頸部に付されている橋状把手の位置を中心軸として、側面図計 5 点、上面、底面各 1 点のほか、全体の文様構成が把握できるように円筒展開図を作成した (図 10・11)。

表現方法は、通常のテクスチャーよりも画像が鮮明な PEAKIT を採用した (横山・千葉 2017、横山 2018)。これにより、胴部文様や底部圧痕の詳細は、2 次元上においてもより明瞭に把握することができる (角度を表示した図のみ、テクスチャーを使用)。

文様構成や表現手法については第 3 項で既に述べられているが、土器を多面的に可視化した際に認識された製作上の特徴を追記として述べておきたい。

当資料は、上面図で確認されるように、頸部に 5 単位の橋状把手が付されている。頸部以下に付されている隆帯区画文はこの把手を基点として施されていることから、土器製作上においては把手を付加した後に胴部文様が施文されたとみられる。付されている把手間の角度を計測すると、把手 a を 0° とした場合、把手 b との間がちょうど 70°、把手 b - 把手 c 間が同じく 70°、把手 c - 把手 d 間が 65°、把

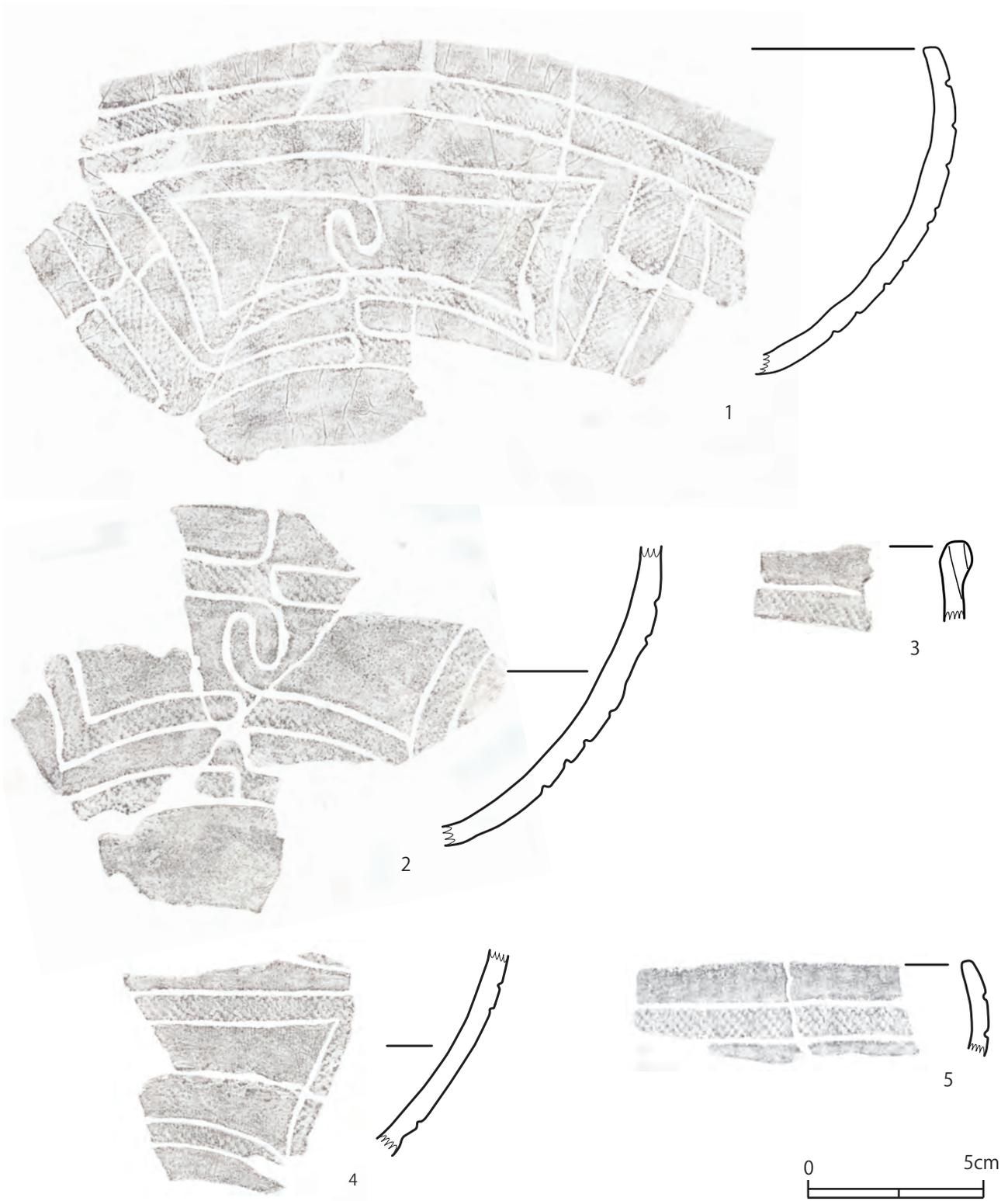


図8 山野峠遺跡出土浅鉢

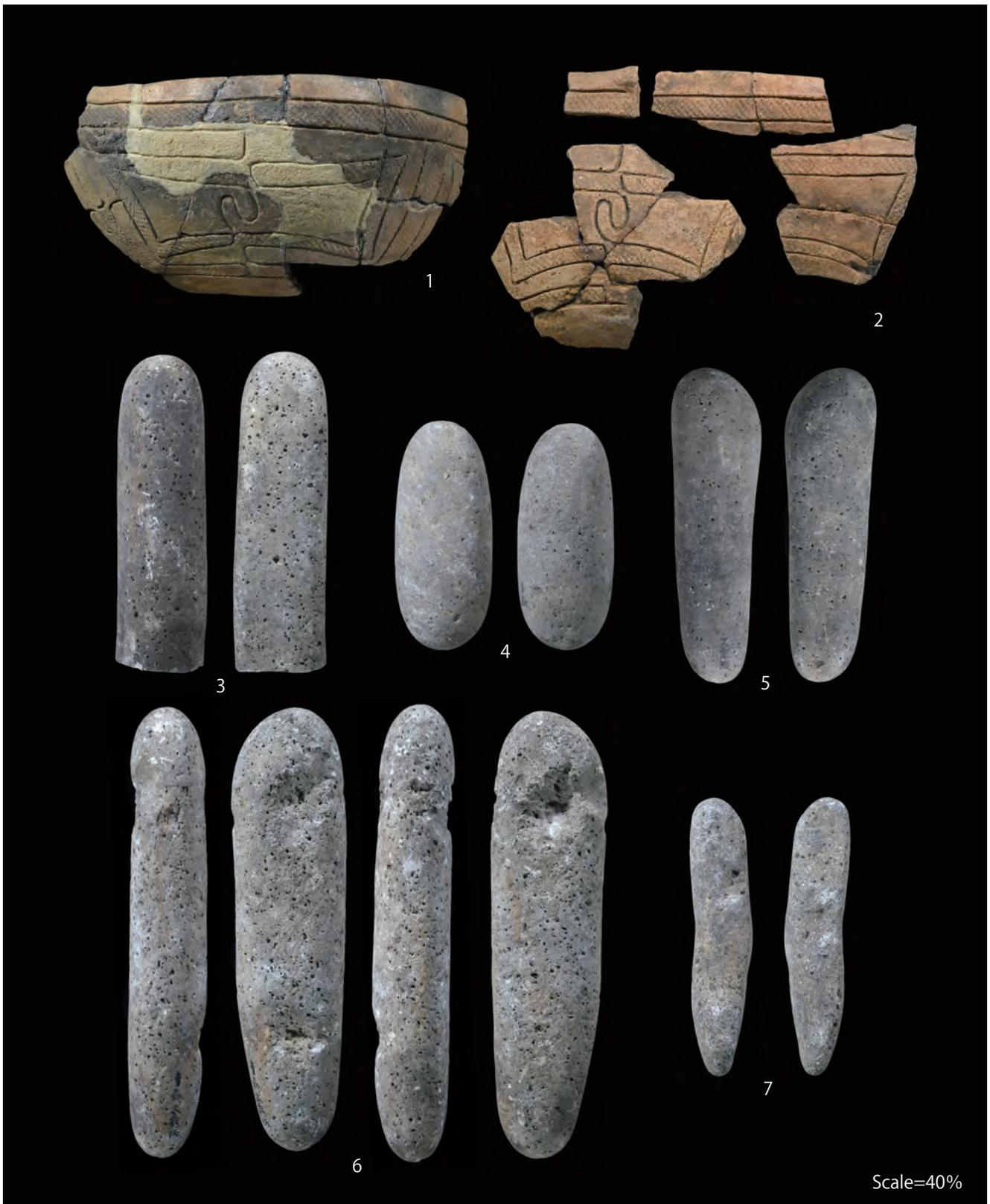


図9 山野峠遺跡出土資料

手d-把手e間が70°、把手e-把手a間が85°となる。aからd間までが正確に70°で誤差も5°程度であるのに対し、eからa間のみが85°と角度がずれており、円筒展開図からも間隔の広さが確認される。おそらく、 $a \rightarrow b \rightarrow c \rightarrow d \rightarrow e$ 、あるいはその逆の $e \rightarrow d \rightarrow c \rightarrow b \rightarrow a$ の順に把手が裝飾され、はじめはほぼ等間隔に付加することができたが、最後の把手を付加した段階で結果的に70°の間隔から逸脱したものと推測される。

縄文土器の施文過程については、あらかじめ幾つかに分割してから施文する「分割型割付法」と、そうでなく場当たりの施文を開始する「集積型割付法」の主に2パターンがあるとされる(鈴木1968)。当土器棺は、橋状把手のような、俯瞰しながら均等に割り付けることが可能な裝飾であるにもかかわらず、一部の間隔のみが異角度であることから、均等に把手を配置することを意識しつつも「集積型割付法」によって製作された可能性がある。縄文後期以降、口縁部文様の単位数が5単位以上に増加することが指摘されている(中村2008)が、こうした事例も同様の手法によって造形、施文されているように思われる。桜井準也氏は、俯瞰しながら製作することが可能な縄文晩期大洞式の小型壺形土器でさえ、「集積型割付法」によって文様が施文される例が多いことを指摘しており(桜井2006)、少なくとも縄文時代後晩期においては通常の施文手法といえよう。(永瀬)

5. 土器棺の赤彩状況

図12①は、肉眼での赤色顔料の範囲を示した観察図で、赤い部分は明らかに赤色顔料とわかる範囲、ピンクの部分は赤色顔料の痕跡として観察される範囲である。外面では、濃い赤色顔料の範囲が橋状把手付近や方形区画文(図12②)等に観察されるが、赤色顔料が薄い範囲や器面に生じた微細なクラックに顔料が残存する範囲(図12③)により、口縁部~胴下部(最張部)の横位の隆帯付近(図12④)まで全体的に赤色顔料が塗布されていることがわかる。内面では、口縁部の一部で器面ピットに赤色顔料が残存する範囲(図12⑤)が観察されることから、当時は口縁部を赤彩していたものと思われる。赤色顔料の色調は、『標準土色帖』の赤色(7.5 R4/8)に近い。

山野峠遺跡出土の現存する土器棺は6点あり、『再葬土器棺墓の研究』(葛西2002)で示されたNo.1が当該土器棺で、No.2~6が青森市教育委員会所蔵となっている。これらのうち、赤彩された土器棺は、No.1・2・5・6の4点で、いずれも土器の焼成後に赤色顔料を塗布したものである。(児玉)

6. 人骨

複数個体分の人骨を認めたものの、完形の骨は少数の手足の骨のみで、頭骨や四肢長骨は断片的であり、形態学的

検討に基づく個体識別は困難であった。それゆえ、肉眼観察によりペアリングを試みた同一部位の左右の骨を除き、各人骨の帰属個体の追求は保留し、部位同定、残存状態の確認、年齢推定、性別判定、計測、傷病変の有無を検討し、人類学的所見を得るにとどめた。計測はマルチンの方法(馬場1991)に従った。

以下、部位別に各人骨の所見を記載する。人骨の名称は『解剖学用語』(解剖学用語編集委員会2007)に準拠し、同一部位の骨が複数存在する場合は、骨名の後に小文字アルファベットを付して区別した(例:右大腿骨a、右大腿骨b)。部位を同定できた人骨を図13に示した(肋骨を除く)。幼児ないし小児と推定した前頭骨1点を除き、全て成人段階の骨である。傷病変については、特に認めた場合のみ記載した。

(1) 頭骨

前頭骨(図13-1):前頭骨の断片。厚さが2~3mmと薄く、幼児ないし小児と推定した。

頭頂骨(図13-2):左右不明の小片で、左右は不明。厚さは7~8mmで、成人と思われた。

下顎骨(図13-3a・3b):左側の大白歯部から下顎枝の下半にかけて残存する。第1・第2大白歯が植立し、第3大白歯は歯槽の底部に死後破損した歯根の断端が残るのみである。第3大白歯の歯根形成が完了しており、成人であることは間違いない。歯の咬耗度について、第1大白歯では象牙質が点状に露出していることからMolnarの3度、第2大白歯では咬耗がエナメル質のみにとどまっていることからMolnarの2度に比定された。縄文時代の成人としては咬耗が軽度であり、壮年段階と思われた。下顎角周辺の筋附着部の発達が弱く、女性的である。齶蝕や歯周炎は見当たらない。第1大白歯に2条、第2大白歯に1条のエナメル質減形成を認めた。

(2) 体幹の骨

環椎(図13-4):両側の外側塊と前弓、および後弓の左半が残存する。赤彩あり。

軸椎(図13-5):椎体と右の関節部、および椎弓が残存する。

胸椎の椎弓(図13-6):順位不明胸椎の椎弓片と右の横突起である。

胸椎a(図13-7):中位胸椎の椎体。

胸椎b(図13-8):下位の胸椎で、椎体の左側の一部を破損するが、概ね全体が残存する。

腰椎a(図13-9):ほぼ完形。加齢性の骨棘はみられない。赤彩あり。

腰椎b(図13-10):椎体のみが残存する。加齢性の骨棘はみられない。赤彩あり。

肋骨:右第1肋骨1点を含む右肋骨片6点、左肋骨片5点、左右不明の肋骨片14点を認めた。左肋骨1点と左右不明肋

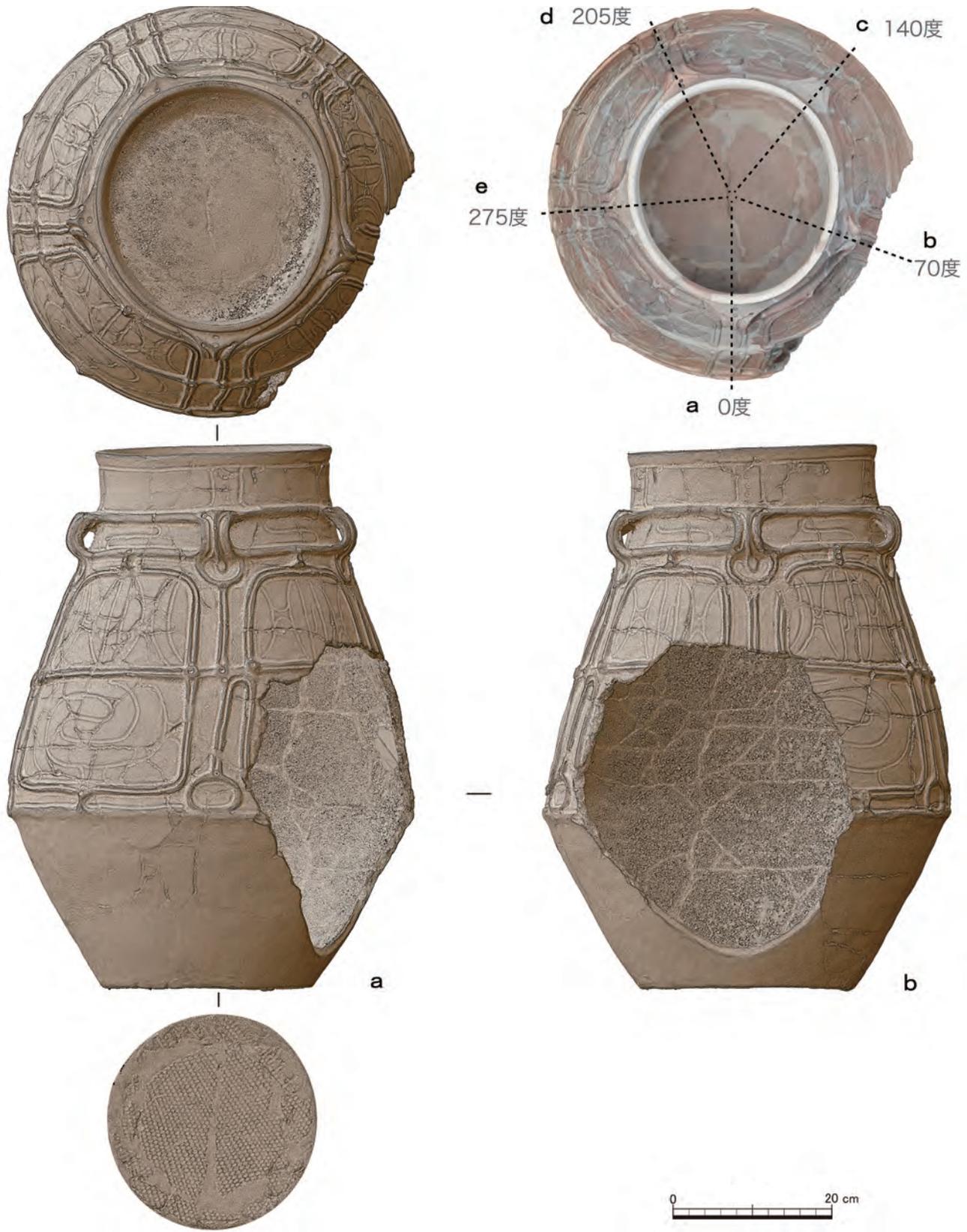


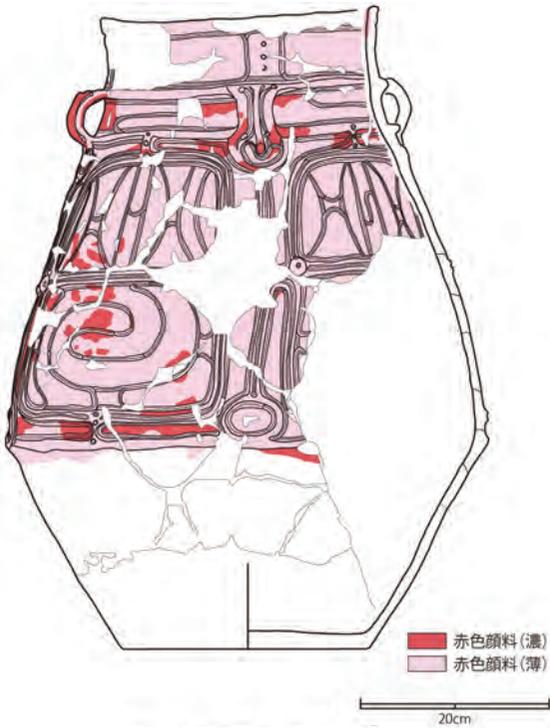
図 10 山野峠遺跡出土の土器棺の 3D データオルソ画像



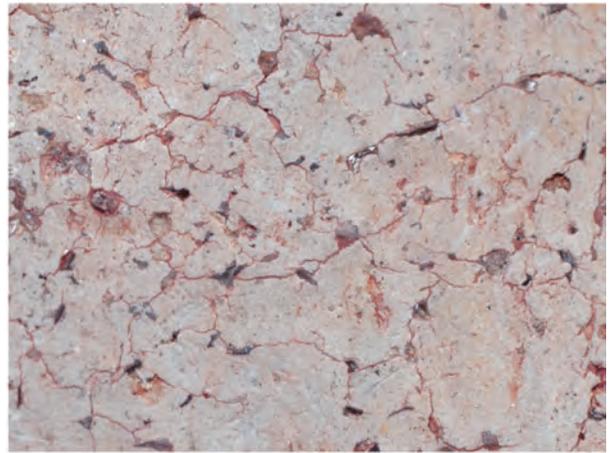
<円筒展開図>



図 11 山野峠遺跡出土の土器棺の 3D データオルソ画像と展開図



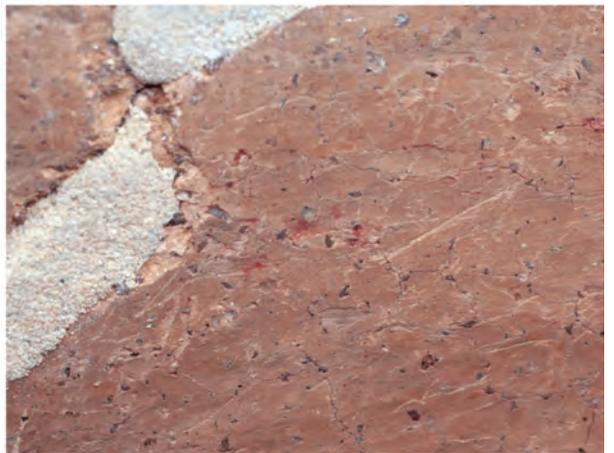
② 方形区画文内外に観察される赤色顔料



③ 器面クラックに残存する赤色顔料



④ 胴下部の隆帯付近に観察される赤色顔料



⑤ 口縁部内面の器面ピットに残存する赤色顔料

図 12 山野峠遺跡出土土器棺の赤彩状況



图 13 山野峠遺跡出土人骨

骨片 2 点に赤彩あり。

(3) 上肢の骨

右鎖骨 a (図 13-11)：肩峰端の断片。赤彩あり。

右鎖骨 b (図 13-12)：両骨端を欠く骨幹部が残存する。赤彩あり。右鎖骨 b と残存部位が重複せず、骨体の大きさが類似することから、両者は同一の骨の可能性はある。

左鎖骨 (図 13-13)：骨幹部から肩峰端にかけて残存する。

右肩甲骨 (図 13-14)：外側縁の断片。

左肩甲骨 (図 13-15)：烏口突起の断片。

右上腕骨 a (図 13-21)：骨幹部から遠位端にかけて残存する。三角筋粗面がやや発達する。肘頭窩に滑車上孔は開存しない。骨体最小周(マルチン番号 7)は 61mm。赤彩あり。

右上腕骨 b (図 13-22)：骨幹部のみが残存する。三角筋粗面がやや発達する。

右上腕骨 c (図 13-23)：骨幹遠位部の断片。右上腕骨 a は残存部位が重複するので別個体。右上腕骨 b とは残存部位が重複せず、骨体の大きさが類似することから、同一の骨の可能性はある。

左上腕骨 (図 13-24)：近位端から骨幹部にかけて残存する。三角筋粗面がやや発達する。右上腕骨 a・b と対称的な形状であり、いずれかと同一個体であっても不自然ではない。骨体の保存状態は、どちらかといえば b に類似する。赤彩あり。

右橈骨 (図 13-25)：近位端から骨幹部にかけて残存する。やや華奢な印象を受ける。骨体最小周(マルチン番号 3)は 41mm。

左橈骨 (図 13-26)：近位端から橈骨粗面にかけて残存する。右橈骨に比べてやや頑丈であり、両者は別個体に帰属するものと思われた。

右尺骨 (図 13-27)：骨幹中央部が残存する。

左尺骨 (図 13-28)：鈎状突起から骨幹中央部にかけて残存する。赤彩あり。

左有頭骨 (図 13-16)：完形。手根骨で確認できたのはこの 1 点のみである。

左第 5 中手骨 (図 13-17)：完形。

手の基節骨 a・b・c (図 13-18・19・20)：基節骨 a は近位端を欠損、b と c はほぼ完形である。

(4) 下肢の骨

右寛骨 (坐骨) (図 13-29)：坐骨の断片。

左寛骨 (腸骨) (図 13-30)：腸骨体および腸骨翼から寛骨臼の上半にかけて残存する。Y 字軟骨が消失して寛骨臼の形成は完了している。耳状面の保存状態は不良で、耳状面の形状の評価に基づく年齢推定は困難であった。大坐骨切痕と耳状面前溝が破損しており、性別は判定できない。

右大腿骨 a (図 13-41)：小転子を含む骨幹近位部。粗線部が発達して後方に突出し、柱状大腿骨の様相を呈する。

右大腿骨 b (図 13-42)：小転子を含む骨幹近位部から中央部にかけて残存する。保存状態は不良で、骨表面の様相は不明瞭。

左大腿骨 a (図 13-43)：両骨端を欠く骨幹部。粗線部が発達して後方に突出し、柱状大腿骨の様相を呈する。骨体中央矢状径(マルチン番号 6)は 30mm、骨体中央横径(7)は 26mm、骨体中央周(8)は 88mm、骨体中央断面示数(6/7)は 115.4。右大腿骨 a と対称的な形状で、保存状態も類似していることから、両者は同一個体に帰属するものと思われた。

左大腿骨 b (図 13-44)：骨幹近位部から中央部にわたる断片で、保存状態は不良。右大腿骨 b と対称的な形状で、保存状態も類似していることから、両者は同一個体に帰属するものと思われた。

右脛骨 a (図 13-45)：両骨端を欠く骨幹部。骨体最小周(マルチン番号 10b)は 73mm。骨表面に軽度の骨膜炎と思われる縦状線紋が認められた。

右脛骨 b (図 13-46)：骨幹近位部から中央部にかけて残存する。保存状態は不良。骨表面に軽度の骨膜炎と思われる縦状線紋が認められた。

左脛骨 a (図 13-47)：外側顆から骨幹中央部にかけて残存する。骨体は頑丈であり、男性的である。骨表面に軽度の骨膜炎と思われる縦状線紋が認められた。

左脛骨 b (図 13-48)：遠位部の断片。左脛骨 a と残存部位が重複せず、骨体の大きさが類似することから、両者は同一の骨の可能性はある。

右腓骨 (図 13-49)：骨幹近位部から中央部にかけて残存する。骨幹部の内・外側面に骨体長軸方向に伸びる凹みがあり、槌状腓骨の様相を呈する。

左腓骨 (図 13-50)：骨幹中央部から遠位部にかけて残存する。右腓骨と同じく槌状腓骨である。

右距骨・右踵骨・右中間楔状骨・左舟状骨・左内側楔状骨 (図 13-31・32・33・34・35)：いずれの足根骨も完形である。右距骨に内果面の前方延長(蹲踞面)が認められた。

右第 4・第 3 中足骨 (図 13-36・37)：いずれも遠位端を欠損する。解剖学的に自然に関節することから、両者は同一個体に帰属するものと思われた。

右第 3 中足骨 (図 13-38)：近位端を含む断片。

左第 4 中足骨 (図 13-39)：完形。

足の基節骨 (図 13-40)：完形。赤彩あり。

(5) 小結

部位を同定し得た人骨は上述の 75 点で、その他に部位不明の小片が十数点確認された。最小個体数は小児 1、成人 2 の計 3 体であるが、各人骨の個体識別は困難であり、人骨群が 3 体以上からなる可能性は否定できない。断片的な人骨が多いが、柱状大腿骨や槌状腓骨、蹲踞面を有する距骨など、縄文時代人骨に多く現れる形態学的特徴 (cf. 山口

1982) が散見された。また、12点の人骨に赤色顔料の付着を認めた。なお、骨表面には齧歯類の齧痕が全くみられなかった。これは、白骨化した遺体が動物の侵襲を受けにくい環境にあった(例えば、土中に埋められた状態にあった)ことを示唆する傍証といえるかもしれない(澤田ほか 2013・2014)。(澤田・佐伯)

7. 出土遺物の編年的評価

山野峠遺跡の土器棺は、1933年に喜田貞吉氏らが峠道の東側斜面を調査した際に、6基の石室内から併せて12個体が出土したとされる(江坂 1967a、葛西 1975)。このうち、所在が確認できるものは当資料1個体(図6、7)のほかに、青森市教育委員会が1970年の再調査時に喜田氏が調査したとみられる石室の近辺で回収した4個体がある。加えて、江坂輝彌氏が1967年に調査した西側斜面の石棺墓群南西端の列外で発見された破片(江坂 1967a)と1970年の調査で青森市教育委員会により回収された破片(葛西 1975)を接合した狩猟文を有する土器棺1個体が同教育委員会に保管されている。なお、慶応義塾大学には山野峠遺跡出土とされる後期前葉十腰内Ⅰ式の壺形土器が1個体保管されているが、1967年の調査で江坂氏が持ち帰った土器棺は上記の狩猟文土器であることから、出土地点については明確ではない。

葛西氏は、当資料を含む現存する6個体の土器棺を、当初、文様構成によってa類(文様が隆起帯によって構成されるもの)、b類(文様が沈線文によって構成されるもの)、c類(磨消縄文手法の見られるもの)の3類に分類し、a類は山野峠遺跡出土のもので最も古い土器棺、b類は青森県内では最も多いタイプ(「堀合式甕棺」)でa類に後続するもの、c類は十腰内第1群の後半期大湯式土器に伴出するもの、としてそれぞれに時間的な差異があると指摘した(葛西 1975)。本資料は、連結沈線文による渦巻文や方形文、コ字状文の主要文様が大柄に描かれる特徴からこの内のb類に分類されている。その後、葛西氏は『再葬土器棺墓の研究』を著して、青森県内をはじめ、北東北から北海道の土器棺出土事例を集成し、先のa類を後期初頭の「牛ヶ沢(3)式期」、c類を後期初頭の「蛭沢Ⅱ期」に位置づけている(葛西 2002)。b類は図化されなかったためか、時間的な位置づけが不明であるが、葛西氏が提示した土器棺の編年案では、c類と同じく「蛭沢Ⅱ期」が特徴的にもっとも近いようである(葛西 2002)。浅鉢(図8、9-1、2)も同様に、主要文様がコ字状文であり、それが大柄に描かれることから「蛭沢Ⅱ期」に近いといえる。

北東北における縄文時代中期末葉から後期前葉にかけての土器編年研究は、地域差や系統差に対する捉え方の違いから様々な見解が提起されている(千葉・高山 2018)(表1)。

表1に示したように、「蛭沢Ⅰ期」、「蛭沢Ⅱ期」(葛西

2002・2005)、「沖附(2)式」、「弥栄平式」(成田 2002)として細分化されていた後期初頭の時期は、『青森県史』の編年では「2期(後期初頭新段階)」(児玉 2013)、『総覧縄文土器』の編年では「十腰内第Ⅱ様式」(榎本 2008)、成田編年(1981)、本間編年(1987・1988)では「蛭沢式」として一つの段階に包括されている。

以上のことを踏まえると、当土器棺と浅鉢は、現時点においては青森県史編年の「2期」(児玉 2013)、総覧縄文土器編年の「十腰内第Ⅱ様式」(榎本 2008)、あるいは「蛭沢式」(成田 1981、本間 1987・1988)に位置づけられるが、当該期の土器編年については、従来からの課題である地域差や系統差のほか、遺跡差などの微視的な視点も視野に今後も検討を続けていく必要があるだろう。(永瀬・青木)

8. まとめ

本研究によって未報告であった東北大学所蔵の山野峠遺跡出土品とその記録について公開することができた。資料に関する分析や考察は、喜田貞吉氏が発掘した約90年前とは格段の進歩があり、現代的評価を行うことができた。特に当時の発見状況と現存する資料の状況の対応関係を示すことができた点は本論の主たる成果である。

具体的な成果として、①喜田氏が持ち帰った各種の資料を提示できた。②土器棺は発見時の破片を一部欠いており、発見時はより完形に近かった。③浅鉢はスケッチ(図1)に示されたAの土器の可能性が高い。④土器棺は集積型割付法によって施文され、施文手順を復元できる。⑤土器棺には赤彩が塗布されたが、体部下半には塗布されなかった。⑥土器棺に含まれていたと推定される人骨は最小個体数で小児1(前頭骨1点のみ)、成人2の計3体である。⑦人骨には齧痕が全く見られず、白骨化時に遺体が動物の侵襲を受けにくい環境にあったことを示す。⑧人骨の幾つかには部分的な赤彩が確認され、再葬にあたっての赤色顔料の塗布が予想される。⑨石棒は自然石を未加工で利用したものが多く、既報の特徴と一致する。

一方で、その歳月のために正確な情報を把握できず、資料の評価に問題を与えている点もある。特に土器棺と人骨の関係をどのように評価すべきかには大きな課題がある。詳細な検討は本論で行う紙数は残されていないものの、例えば、青森県内の同時期の土器棺の事例を見ると、成人骨1体が納められることが一般的である。本例では複数個体が一つの土器棺に納められた可能性を残しているが、ここでは5つの可能性を具体的に示し、今後の議論の方向性を示したい。

- ① 喜田氏が山野峠遺跡の他の土器棺の人骨も一緒に持ち帰った。それらの資料が保管中に混在して一つの棚に収められてしまった。
- ② この人骨は、収蔵庫の中の展示棚の引き出し

表 1 北東北における縄文時代後期初頭～前葉の土器編年対照表（千葉・高山 2018 より抜粋）

| 時期 | 本間(1987・1988) | 児玉(2003) | 児玉(2013) | 成田(1981) | 成田(2002) | 榎本(2008) | 葛西(2005) |
|------|---------------|----------|-------------|----------|----------|----------|----------|
| 後期初頭 | 上村式 | 小牧野遺跡1期 | 1期(初頭古段階) | 第Ⅲ群 | 牛ヶ沢3式 | 十腰内第Ⅰ様式 | 牛ヶ沢(3)式 |
| | 葦窪式 | | | | | | |
| | 蛭沢式 | 小牧野遺跡2期 | 2期(初頭新段階) | 蛭沢式 | 沖附(2)式 | 十腰内第Ⅱ様式 | 蛭沢Ⅰ期 |
| | 小牧野遺跡3期 | 前十腰内Ⅰ式 | | 前十腰内Ⅰ式 | 十腰内第Ⅲ様式 | | 蛭沢Ⅱ期 |
| 後期前葉 | 十腰内Ⅰ式 | 小牧野遺跡4期 | 3期(十腰内Ⅰa段階) | 十腰内Ⅰa式 | 十腰内ⅠA式 | 十腰内第Ⅳ様式 | 十腰内Ⅰ式(古) |
| | 大湯式 | 小牧野遺跡5期 | 3期(十腰内Ⅰb段階) | 十腰内Ⅰb式 | 十腰内ⅠB式 | 十腰内第Ⅴ様式 | 十腰内Ⅰ式(中) |
| | 十腰内Ⅱ式 | | 3期(四ツ石式) | 十腰内Ⅱ式 | 十腰内Ⅱ式 | 十腰内第Ⅵ様式 | 十腰内Ⅰ式(新) |

(No.1894) に保管され、「久栗坂」のラベルと一緒に保管されていた。ただし、その引き出しには「北貝塚」の記載があり、この貝塚の人骨が混入した可能性を考慮する必要がある。北貝塚はサハリンの伊東信雄氏の調査資料であるが、この人骨には移送の際に使われた糊殻が数多く付着していた。サハリンではコメの栽培がないため、この人骨がサハリンから持ち運ばれたものとは考えにくい。また、赤色顔料が付着しており、骨化のあと再葬の際に土器棺と同様に顔料が塗布されたと予想される。これらの状況はサハリンの北貝塚の状況には合致しない。そのため、この混入の可能性は低く、山野峠の人骨と判断し、今回報告に至った。

- ③ 山野峠の一つの石棺に入っていたものであるが、一つの土器棺に納められていたものではない。写真(図5)にある通り、土器棺内の土壌は土器を取り外して回収されている。したがって、こぼれた土壌が石棺内の土壌と混在した可能性は十分に考えられる。そのため、土器棺内にあった1体分の人骨が、石棺内の他の人骨と混在し、3体分が回収された。この場合、石棺が一次葬の場と推定される。
- ④ もともと一つの土器棺に3個体の人骨が意識的に納められた。この場合、「土器棺合葬墓」となる。葛西氏の報告(1975)では、「喜田博士が持ち帰られた甕棺には2人分の人骨が納入されていた事実」とある。この「事実」とした根拠が喜田氏のいずれの報告に依拠したものかは明らかでないが、あるいは1969年まで存命した長谷部言人氏より教示を受けていた可能性がある。
- ⑤ もともとの土器棺に3個体分の人骨が意図せずに納められた。石棺墓もしくは、土坑墓を一次葬とし、そこに含まれる骨化した人骨を土器棺に移す際に混入した。

本論は学史的な資料の再評価であるため、幾つかの問題点を残している。しかし、新たな事実を報告することによ

て、縄文時代後期土器棺墓を巡る研究の発展に僅かでも寄与できればと願うばかりである。(鹿又、永瀬、児玉、澤田)

註

註1：江坂(1967a)で図示されていたスケッチでは、6基の石室から検出された土器に人骨が含まれていたことを示す斜線のトーンが掛けられている。この場合、全石室より人骨がみつまっていることとなり、人骨入り土器は「6個」となる。しかし、葛西(1975)で図示された同一のスケッチでは、北東隅の石室から検出された土器のトーンが外され、「人骨が納入されていた個体は5個」と言及されている。本稿では、スケッチに対してより詳細な説明が加えられている葛西(1975)の図を採用した。

謝辞

本論の資料調査にあたり、下記の諸氏に御教示、御協力を賜った。

安藤広道(慶應義塾大学)、横山 真、千葉 史(株式会社ラング)、菅野智則、柴田恵子、白石浩子(東北大学埋蔵文化財調査室)、斉藤慶史(三内丸山遺跡センター)、品川欣也(東京国立博物館)、佐藤智生(青森県埋蔵文化財調査センター)、野澤 望(小牧野遺跡保存活用協議会)

参考文献

- 青森市教育委員会 1983『山野峠遺跡』
 江坂輝彌 1967a「青森県久栗坂 山野峠遺跡」『考古学ジャーナル』13 pp.12-13 ニューサイエンス社
 江坂輝彌 1967b『日本文化の起源：縄文時代に農耕は発生した』講談社現代新書108、講談社
 江坂輝彌 1968「縄文土器文化後期における改葬甕棺墓の研究」『北奥古代文化』創刊号 pp.3-7 北奥古代文化研究会

- 榎本剛治 2008「十腰内I式土器」『総覧縄文土器』 pp.530-535 アム・プロモーション
- 解剖学用語委員会(編) 2007『解剖学用語, 改訂13版』医学書院
- 葛西 勳 1975「青森県山野峠石器時代墳墓遺跡について」『北海道考古学』第11輯 pp.27-39 北海道考古学会
- 葛西 勳 2002『再葬土器棺墓の研究—縄文時代の洗骨葬—』再葬土器館墓の研究刊行会
- 葛西 勳 2005「十腰内I式土器の研究」『研究紀要』No.8 pp.11-28 青森大学考古学研究所
- 葛西 勳 2006a「山野峠遺跡の調査」『新青森市史 資料編1 考古』pp.26-29 青森市
- 葛西 勳 2006b「第66節 山野峠遺跡」『新青森市史 資料編1 考古』pp.482-489 青森市
- 葛西 勳 2006c『続・再葬土器棺墓の研究』再葬土器棺墓の研究刊行会
- 葛西 勳 2013「第II部遺跡編 第I章縄文時代後期 1 山野峠遺跡」『青森県史資料編考古2』pp.62-65 青森県
- 鹿又喜隆 2022「赤煉瓦書庫に残る法文学部の研究と教育の記憶」『学都仙台の近代高等教育機関とその建築』pp.96-102 東北大学出版会
- 鹿又喜隆・菅野智則・加藤 諭・曾根原理 2023「東北考古学の礎—東北大学奥羽史料調査部から現在へ—」『東北大学史料館研究報告』第18号 pp.87-103
- 喜田貞吉 1934a「青森県出土洗骨入土器」『歴史地理』63-6 pp.84-88 日本歴史地理研究会
- 喜田貞吉 1934b「奥羽地方石器時代實年代の下限—宋銭発掘の確實なる亀岡式土器遺蹟調査報告—」『歴史地理』63-1 pp.1-14 日本歴史地理研究会
- 児玉大成 2003「小牧野遺跡における縄文後期前半の土器編年について」『小牧野遺跡発掘調査報告書VIII』pp.147-166 青森市教育委員会
- 児玉大成・蝦名 純 2003『小牧野遺跡発掘調査報告書VIII』青森市埋蔵文化財調査報告書第70集 青森市教育委員会
- 児玉大成 2013「第I部時代概説 2土器の編年 第1節 縄文後期」『青森県史 資料編 考古2 縄文後・晩期』pp.8-16 青森県
- 桜井準也 1998「縄文土器製作における文様区画と施文過程—縄文人の認知構造の解明にむけて—」『東邦考古』22号 pp.31-46 東邦考古学研究会
- 桜井準也 2006「土器の文様区画と認知構造」『心と体の考古学』pp.133-160 同成社
- 澤田純明・千代田高明・嵯峨将央・羽富悠太・星野敬吾・長岡朋人・平田和明 2013「西谷古墳出土人骨について」『富津市西谷古墳』pp.33-40 公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター
- 澤田純明・佐伯史子・鈴木敏彦・篠田謙一 2014「大膳野南貝塚出土人骨の形態学的報告」『大膳野南貝塚 第III分冊-本文編3-』pp.841-907 公益財団法人千葉市教育振興財団
- 鈴木公雄 1968「安行式土器における文様単位と割りつけ」『日本考古学協会昭和43年度大会研究発表要旨』pp.5-6
- 千葉 毅・高山理美 2014「東北地方北部における縄文時代後期初頭から前葉土器編年研究の現状と課題—青森県安部遺跡出土土器の理解のために—」『縄文時代』第25号 pp.91-115 縄文時代文化研究会
- 中村 大 2008「文様単位数とその意味」『総覧縄文土器』pp.1162-1167 アム・プロモーション
- 成田滋彦 1981「青森県の土器」『縄文文化の研究』4 pp.123-132 雄山閣
- 成田滋彦 1989「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4 pp.277-280 小学館
- 成田滋彦 2002「第4章まとめ 第1節遺物に関するまとめ (1) 第IV群土器(縄文時代後期)」『三内丸山(6)遺跡IV』pp.375-386 青森県教育委員会
- 馬場悠男 1991『人体計測法II 人骨計測法』雄山閣
- 本間 宏 1987「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」『よねしろ考古』第3号 pp.31-50 よねしろ考古学研究会
- 本間 宏 1988「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』第4号 pp.71-84 よねしろ考古学研究会
- 山口 敏 1982「縄文人骨—縄文人骨の特徴」『縄文文化の研究1 縄文人とその環境』pp.27-54 雄山閣
- 横山 真・千葉 史 2017「PEAKITによる考古遺物の視覚表現」『季刊考古学』第140号 pp.30-33 雄山閣
- 横山 真 2018「三次元技術を考古資料の記録に用いることの意義」『国史学』第226号 pp.77-97 国史学会